

1. 前回までの検討内容の整理

第1回公社造林あり方検討会（平成30年11月15日）

検討テーマ

◇ 公社造林の現状と課題

委員の意見

◇ 不採算林の契約解除および解除後の支援について

- 公社が不採算林の解約を進めていく上では、契約解除後にいかに行政として県が支援していくのが求められる。
- 環境林整備事業で対応できない林（木のないところ、木の育っていないところ）について、契約解除後の管理の方法はないか。
- 不採算林といえども、水源林として環境上、重要な場所が多いので、行政としてどのように森林管理していくのか。
- 返地後の林型について、試験研究機関と連携して考えた方がよい。
- 環境林としての機能を発揮できるように、道筋を付けたうえで返地する形を取るべきである。

◇ 目標林型の設定について

- 平成27年から伐採を始めたばかりなので、伐採後の下層植生等の状況を確認しながら、今後の伐採にかかる計画を立てるとよい。
- どのように林を仕立てていくか、天然更新にあたっては、シカの食害が懸念されるので、植栽を含めた計画も選択肢として必要と考える。

◇ 木材の流通環境の整備について

- 公社材はB材が多いことから、県内流通量や素材生産量を増やし、地域経済のために、県内でB材を使える環境を整備することも視野に入れるべき。

第2回公社造林あり方検討会（平成30年12月25日）

検討テーマ

- ◇ 公社造林の現状と課題
- ◇ 現場視察（甲賀市信楽町黄瀬角チ 2808-206）

委員の意見

- ◇ 森林管理について
 - 天然更新を目指すには、林地に光を入れるような方策を考える必要がある。
 - 広葉樹林化に際しては、調査を進めてデータを取りながら、逐次方向性を決めていくこと。場所によって、生育環境の特性が異なるため、臨機応変にこまめに対応をすること。
 - 天然下種更新は、技術的に難しい。専門家に見てもらい、時間をかける必要がある。
- ◇ 木材販売について
 - どこにどれだけの木があるのかを5年先まで示してもらおうと、使う側は計画的に事業量を考えられる。使う材料も見据えることができる。
 - これから木材を供給していく時期に、人工乾燥機を有する業者が県内に6者しかないのは厳しい。この点も視野に入れる必要がある。
- ◇ 木材生産（選木）について
 - 現時点では、収益性を中心に選木しているが、天然更新や生物多様性を意識しながら、どの木を残すかという観点で選木する考えもある。

第3回公社造林あり方検討会（平成31年3月29日）

検討テーマ

- ◇ 公社林の目指す姿について
- ◇ 森林整備・管理について
- ◇ 伐採方法の選択について

委員の意見

- ◇ 公社林の目指す姿について
 - 捕獲によるシカ対策が行われないと、公社林で考えている天然更新が実現できないことになる。シカ対策も連携させる必要がある。
 - 滋賀県が目指す天然更新および抜き伐りに関しては、先行事例がないことから、試行錯誤しながら、研究者らとの連携が不可欠。
 - 抜き伐りで高木がなくなった後に常緑の低木種が繁茂し、高木性の広葉樹が植生しなくなると思われる。天然更新のためには、低木種対策が必要である。
- ◇ 森林整備・管理について
 - 解約による返地については、土地所有者に任せるのではなく、行政の責任として環境林整備事業を継続すべきである。
 - 公社林の公益的機能を発揮させるにあたって、伐採予定地のうち収益性の無い部分において、公社が行う森林整備に対して十分な助成が無いことが厳しい。
- ◇ 伐採方法の選択について
 - 現場ごとに状況が違うため、伐採方法の取り決めをしない方がよい。現場ごとに状況を見ながら、伐採方法を選択できるような柔軟性を残しておく方がよい。
 - 環境林に誘導するのであれば、定性間伐が一番良い。

第4回公社造林あり方検討会（令和元年5月27日）

検討テーマ

- ◇ 効率的な木材生産について
- ◇ 木材の有利販売について
- ◇ 分収契約の変更について

委員の意見

- ◇ 効率的な木材生産について
 - 生育が悪いところなどの採算性の無いところは、発注しても無駄になるため、現場の事前調査のための人員確保が大事になってくると思われる。
 - 全国的に林業事業者が減ってきており、業者を奪い合っている状況。生産性が高まるように、「滋賀もりづくりアカデミー」などで事業者をいかに育成していくのか考える必要がある。
- ◇ 木材の有利販売について
 - 木材が販売され、県産材が使われ、製品ができてという地域内で循環できる流れができれば、それで生活する人も出てくるため、県内での木材需要を高めるような県の政策も期待したい。
 - プレカット工法が普及する中で、人工乾燥機を持っている事業者が6者しかないというのは弱い印象。製材工場の生産性をいかに高めるのかについて、力を入れる必要がある。
 - プレカット工法が多くなってきているが、県内事業者の寸法精度が低く、県外の材料と見比べると品質が悪い。一方、ヒノキなどについては、化粧材などA材として使えるものが多く流通している印象がある。品質の良し悪しを見極める人材を育成することで、B材をA材に変えることも可能になるのではないかな。
- ◇ 分収契約の変更について
 - 分収契約の変更および契約解除の目標を達成することは、借入金を返済するうえで非常に重要かと思うので、引き続き交渉を頑張ってもらいたい。
 - 交渉に際しては、単に契約の内容の話だけでなく、最終的に森林を返すことになるため、造林の仕方についても説明をしてもらいたい。
 - 返地した後でも水源林としての役割を有しているため、県としてきちんとアフタケアしていく必要がある。